

## 2023 年度特別研究助成【奨励課題研究】報告書

北陸大学長殿

所属・職名 国際コミュニケーション学科 講師

氏名 伊藤 梢

研究課題名：民藝概念の持続と多重性にみる「より良い暮らし」を希求する実践の研究

申請額：200,000 円

## 研究成果の概要

当初は主要な研究対象として民藝愛好家を念頭に置いていたが、調査中に石川県内でオーガニック給食推進団体と知り合ったことが研究の方針を転換させた。しかし当初の研究方針から大きく外れるわけではなく、食と農のグローバルな展開から自らの身体をを切り離そうとする試みは、より良い暮らしへの希求が社会的に自然を生み出していく過程を分析する際の重要な事例となるものである。一方で、基礎資料の収集を目的とした研究であったため成果発表の機会は少なかったが、国会図書館での資料収集により、今後の分析を進める基盤が整ったと言える。今後は自然食・オーガニックといったキーワードのもと、食と農の実践に関するフィールドワークを継続し、収集した資料の分析とフィールドで抽出した新たなキーワードによる更なる文献収集を進めたい。

## 研究目的

研究開始時の背景・着想に至った経緯などを含めて目的を記入して下さい。

2020 年以降のパンデミック下において、都市封鎖またはそれに類似する状況の中、人々は日常の暮らしそのものを否が応でも直視せざるを得なくなった。文化人類学において「暮らし」とはまさしくフィールドそのものであり、あらゆる社会の暮らしが研究対象となってきたが、特に近年では「より良い暮らし」や「ウェルビーイング」のあり方を明らかにしようとする (Fisher 2014) 流れがある。また主に医療人類学の分野では、高齢化、多文化化が進む社会における多様なウェルビーイングのあり方に関する研究が進められている (鈴木他 2010)。

そこで本研究では民藝愛好者を始めとする人々の「より良い暮らし」を希求する主体的実践に焦点を当て、人間と非人間 (non-human) が織りなす「より良い暮らし」の構築に向けた実践の描写を目的とする。人類学的ウェルビーイング研究の嚆矢である Fischer は、人の経済活動における取捨選択と社会文化的価値観が絡み合いながら実践されるウェルビーイングとは何かを考察するが、本研究では「何を買うか」のみならず、どのように作り、食べ、「暮らし」を対象化して主体的に構築するのかまでを射程に入れる。また、ポストモダン以降の人類学の流れの中で、物質を完全な客体とみなすことに異を唱え、ヒトとモノの相互的關係による生成の動きについて考察することが隆盛となっているが、本研究もそうした流れに位置付けられる。

## 研究の方法

本研究で用いる研究方法是、文献の総覧による言説分析、現地資料の渉猟、参与観察と聞き取りを中心としたフィールドワークを採用した。フィールドワークにおいては、柳宗悦や棟方志功といった民藝運動の中心人物がかつて滞在し、現在でも民藝協会の活動が盛んな富山県と、隣県でありながら民藝協会が設立されず、民藝の語を冠した活動が乏しい石川県を主な調査地とする。主な調査対象となる人々は民藝協会員、民藝販売店の経営者と顧客であるが、これらに限定せず調査の中で柔軟に対応した。さらに前述の目的達成のため、以下の 3 段階に分けて調査を進めることとする。

(1) 戦後の「暮らしの復権」を先導した生活情報誌および近年のライフスタイルマガジンにおける民藝とその近似分野の分析 (2) 民藝に関わる実践の地域的发展と継承の通時的分析 (3) より良い暮らしを求める人々の実践のエスノグラフィ

このうち研究期間内では (1) の資料収集および (3) のより良い暮らしを求める人々の実践に関する調査を主として行なった。

**研究成果**      引用文献は文末に<引用文献>として記入して下さい。

調査中に石川県内で活動するオーガニック給食推進団体と知己を得たことが研究の方針を転換させることとなった。意図したことではなかったが、当初の「暮らし」を主体的に構築しようとする実践の研究から大きく外れるものではない。むしろここで見られた食と農のグローバルな展開から自らを切り離そうとする試みは、今後マルチスピーシーズ的状况の中で自然が社会的に生み出されるプロセスを考察する重要な事例になることが予想される。他方で、当該予算を用いた本研究は萌芽段階の研究として基礎資料の収集を目的としていたため、成果発表の機会は乏しいものとなってしまった。しかし2月に実施した国会図書館での10日間の集中的な渉猟で基礎資料の充実を図ることができたため、以降はこの分析を着実に進めたい。以下、フィールドワークの成果と資料収集の成果についてそれぞれ記述する。

(フィールドワーク)

2022年度より引き続き調査を行っていた民藝店からの紹介で、県内で活動するオーガニック給食推進団体と知己を得、副代表へのインタビューおよび当該団体が主催する自治体との意見交換会、講演会に複数回参加して参与観察を行なった。団体のメンバーは多くが子を持つ母親であり、前述のイベントを結節点として行政、生産者、消費者、および自然農法を推進してきた各種の団体が交錯する様子を目の当たりにした。主な主張としてはグローバル企業による食と農のネットワークがもたらすリスクに主眼があり、ある特定の農薬が子供の発達に及ぼす影響との因果関係の不確実性への不安がたびたび語られていた。また、自然食品店2店舗でのインタビューを実施したほか、現在自然食料理教室での参与観察を継続中である。いずれもかつて経験した健康不安や子世代への健康リスクを意識した言説が多く聞かれるとともに、特に未婚・既婚を問わず女性がリスクへの不安を通して現代医療や科学、また国家への不信を露わにし、「食べない」という選択によって上述のグローバルな食・農のネットワークから身体を切り離し、オルタナティブとしての自然を獲得しようとする傾向が見られた。

(資料収集)

2024年2月8日から17日にかけて国立国会図書館本館で主に自然食に関する資料の収集を実施した。NDLサーチでキーワード「自然食」でヒットした1447件の資料のうち、オンラインでの取得が不可能なものを中心に1982年までに出版されたものを総覧することができた。確認できる中で「自然食」の語が出版物に登場する最初の例は二木健三「食物と健康」(1921)であり、以降戦後の公害や食品添加物の健康被害により1960年代から自然食への強い希求が認められた。これは福間(2017)の指摘と一致する。70年代には玄米や野菜といった食品に加え、サプリメント的な健康自然食品の流通の拡大が見られた。また、それ以降も断続的に小さなブームが起り続けていることが今回の渉猟により確認できた。しかしながら近年では同一の関心を持つ人々のバズワードも多様化しているため、今後は自然食に加え、自然農、オーガニック、有機といった語による資料の収集を進めたい。

【参考資料】

福間良明(2017)「働く青年」と教養の戦後史：「人生雑誌」と読者のゆくえ、筑摩書房。

**主な発表論文等**      論文・学会・HP等の発表があれば、項目ごとに記入して下さい。

学会発表

“Living Healthier between Nature and Pseudoscience: Shizen-shoku (Natural food) movement in Japan and its entanglement with pseudoscience” East Asian Anthropological Association Annual Meeting, at Chinese University of Hong Kong, 6th Oct., 2023.

経費

費目別内訳	消耗品費	旅費	備品費	その他	計
	0	118,760	0	48,117	167,877

主な備品の内訳(1品又は1組もしくは1式の価格が10万円以上のもの)

品名	仕様	数量	単価	金額	納期
					年 月
					年 月
					年 月

組織

分担・協力者	氏名	所属・職位	役割